

## 本願寺教学伝道研究所だより

## 『浄土真宗辞典』(仮称)の編纂について

## はじめに

本願寺教学伝道研究所(満井秀城所長)の聖典編纂部門は、その前身である浄土真宗教学研究所・聖典編纂委員会のごとき以来、『浄土真宗聖典』の編纂業務を担当してきました。これまでに、『原典版』『註釈版』『現代語版』といった各種聖典が発刊されました。

そして、親鸞聖人七百五十回大遠忌法要をお迎えする本年三月には、およそ三十年にわたる聖教の調査・編纂業務の成果を結集した『浄土真宗聖典全書』(全六巻)の嚆矢として「第二巻(宗祖篇上)」が発刊されました。この『聖典全書』シリーズは、真宗関係の聖典としては、収録聖教や対校本の数などからして、学術的に最高の水準をもつものということができます。

現在は、第二弾となる「第一巻(三経七祖篇)」の発刊に向けての編纂作業が着々と進められています。そして、そ

の一方で、これまでの聖典の編纂とは異なる、これまでにない新たな企画が進められています。それが『浄土真宗辞典』(仮称)の編纂です。この『辞典』の編纂については、すでに『宗報』二〇一一年一月号にも採りあげられましたが、ここでもあらためてそのコンセプトについてご紹介したいと思います。

## 『聖典』を拜読するための

## 「辞典」として

『浄土真宗聖典』シリーズの刊行により、私たちは聖典のお言葉に、比較的容易に接することができるようになりました。しかしながら、聖典を通して浄土真宗のみ教えを学ぼうとするとき、そこで目の当たりにする仏教・真宗の専門用語は、現代の私たちにとって非常に難解なものといわざるをえません。

そのようなときに求められるのが、用語の解説です。『註釈版』には、聖典の本文に出る専門用語に対し「脚註」(巻

末註」「補註」として註釈が付されており、その意味が解説されています。また、用語索引によって、その言葉の出でくる他の箇所、頁数を調べて参照することもできます。これらの註釈類は、聖典に出る言葉を調べるのに非常に便利であるといえます。

『浄土真宗辞典』では、このような『註釈版』の長所がそのまま引き継がれ、聖典の本文に出る専門用語が多く採録されます。そして、『註釈版』では、紙面の制約上示すことのできなかった用例や解説に関する諸説、あるいはその他の関連用語など、新たな情報も盛り込んで、より充実した解説となっています。

### 汎用性の高い「辞典」として

『註釈版』の巻末註・補註には、およそ一三〇〇語ほどが採録され、解説されていますが、これらは聖典の言葉を調べるのに特化した解説であるといえるでしょう。

このたびの『辞典』には、聖典に出る言葉以外にも、さまざまな分野の言葉も大幅に追加して、約五〇〇〇の用語が採録される予定です。つまり、仏教一般に用いられる基本的な専門用語から、浄土真宗の教義や歴史、あるいは仏壇のお荘厳や日常の勤行に用いられる作法にいたるまで、聖典の拝読という場面以外にも、さまざまな場面を想定した『辞典』となっています。

そして解説内容については、『註釈版』の巻末註・補註における解説の方針を踏襲しながらも、必要に応じて多角的な視点からの工夫が取り入れられています。例を挙げてご紹介しましょう。

積尊の教えについて示し（依経段）、次に七高僧の論釈にしたがってそれぞれの釈功をたたえ（依釈段）、終りに真実の信心を得て往生を願うべきことを述べて結んでいる。

本願寺では日常の勤行に『礼讃』が読誦されてきたが、文明の初め頃から念仏に和讃を六首交えて読誦するようになったとされる。蓮如は文明五年（一四七三）に『正信偈』に『三帖和讃』を合わせた四帖一部を刊行し、これ以降『正信偈和讃』の勤行が広く行われるようになった。

なお、昭和二十三年（一九四八）に蓮如上人四百五十回忌の記念事業として本偈頌が訳され、意識勤行「しんじんのうた」が制定された。また、昭和四十八年（一九七三）には、真宗教団連合において親鸞聖人御誕生八〇〇年・立教開宗七五〇年の共同事業として、共通勤行「和訳正信偈」が制定されている。

しょうしんげ「正信偈」「正信念仏偈」のこと。親鸞の作。『教行信証』『行巻』の末尾（註二〇三）にある七言一句、百二十句の偈頌。初めに阿弥陀仏の尊号をあげて自らの帰敬の意をあらわし（帰敬頌）、次に『大経』の説示にしたがって阿弥陀仏の本願とそれを説いた

これは『辞典』に採録する「正信偈」の項目の解説文（暫定案）ですが、「正信偈」そのものについての説明だけでなく、それが、日常の勤行に用いられるに至った経緯をも含めた解説となつています。

また、解説文中に「\*」が付されている言葉がありますが、それはその語が『辞典』に採録されている用語であることを意味しています。これは、解説文中に使用される用語について、それ自体が難解である専門用語があつても、『辞典』の他の箇所にある解説を参照することにより、その意を汲み取りやすくするための配慮です。派生する関連項目もあわせて参照することにより、より深く学ぶことができるでしょう。

### 最新の研究成果を反映

仏教・真宗に関する研究は現在も進んでおり、ときに従来にはなかった新しい学説が提示され、それが学界において支

持されていくことがあります。例えば、親鸞聖人の妻が恵信尼さまであることは、皆さんご存じのことだと思えます。

従来の学説では、恵信尼さまが越後出身と考えられていたことから、親鸞聖人と恵信尼さまが結婚されたのは、親鸞聖人が越後へ流罪るどいとなつた後のことであるとされてきました。しかしながら、今日では京都結婚説が主流となつていきます。

したがって、昨年の三月に発刊されたばかりの『増補改訂 本願寺史』第一巻（本願寺史料研究所編）には、「宗祖と恵信尼が結婚したのは京都であつたと考えられる」（七一頁）とありますし、また、アニメの『親鸞さま——ねがい、そしてひかり。』（本願寺出版社）にも、京都吉水の法然ほふねん聖人の草庵くわんにおいて、お二人が初めて出会われるシーンが描かれています。

このたびの『辞典』は、こういった学界的動向を踏まえた上で、従来の学説とともに、新しい学説を積極的に取り入れて解説をするよう心がけています。

### 『聖典』拝読の手引きとして

聖典編纂部門にとって、本格的な『辞典』の編纂は初めての試みで、ノウハウがなく悪戦苦闘しているのが正直なところですが、『註釈版』をはじめとする各種聖典の編纂成果をフル活用して、採録用語に対する解説文の作成作業に取り組んでいます。

聖典の言葉のみならず、仏教一般で用いられる基本的な用語や、浄土真宗の教義・歴史・人名・旧跡・儀礼などに関しても、ポイントとなる重要な用語を採録し、インドから中国を経て日本へ伝わった仏教思想を背景とする親鸞聖人の教えや、それが受け継がれていった浄土真宗の歴史を学ぶのに適した、総合的な『辞典』となるよう、鋭意努力しているところです。

（聖典編纂部門研究員 稲田英真）